

桧枝岐を語る【上】

この村は果たして
平家の落村人か



「碑」

桧枝岐温泉観光協会提供

貴族的な言葉

奥ゆかしい
墓や石仏

（カットは村の副産、増製の花
桶、スケッチは高貴な碑の
一ツ）

はっきりしない先祖

の三族が戸数九一八、人口六一
六人ばかりの大部分を占め（現
在の戸籍人は五七二、中女子は
二二二人多い）、最近越後方面よ
り二人ばかり新加入の姓名があ
る。結局この村の傳説である平
家の落村人は確定的なものでは
ないが、さうだと信じて大した
問題ではないのである。

桧枝岐を語る【上】

文・小林金次郎・書・熊田大三

この村は果たして
平家の落村人か

桧枝岐村は若松市から南へ約
二十五里ばかり離れた山村であ
るが如何なる理由かこの地方民
の言語、風俗、生活状態等は著
るしく他とことなつてゐる。夫
では必ず遠く他國の人が世を
送つてこの山里にかくれたもの
が大勢に人口も人衆も増えて現
在に至つてゐる。

極の特殊な部落を形成したので
にあるまいかといはれてゐるの
が一説である。
またその言語、風俗等が非常
に奇抜であることとから推し
て、これ源平の合戦に敗北した
平家の高貴な人々が逃れて來た
ものであらうといふ説もある。
いづれにせよこの部落のみが他
村他國とは全く別世界であるこ
とは確である。

その言語が非常に貴族的な例
として。
墓所を「墓所」 食器を「ゴキ」（御
器五器）
佛堂を「ブツドウ」 有難い
トウタイ（多い）
などといふ。又此地方の方言に
さうだらう、さうでせうを「サ
ウダカン」
技術の下手な人を「ニチウ」
などといつてゐる。

貴族的な言葉
この部落の語に足るを著る人は
まづこの村の人々の言語に驚く
全くそれは會津の方言になづ
かう語とは異つて、その發音と
言語そのものが美しく上品なの
は誰しも驚かすにはあられのない
言葉は奇麗で語尾まで明瞭で一
つ京都人の言語に似てゐる、た
ゞ幾分口癖を感じと語尾に妙な
アクセントを伴ふから、もしさ
うした點を取除いたとしてこ
の地方の女に婉婉の振袖でも
着せるならば京都人だといはれ
ても誰も不審を抱かないであ
らう。



奥ゆかしい墓や
石佛
村へ入る道沿の両側には澤山
の石碑や石佛が立並んでゐるが
いかにも古めかしい貴族的な、
小さいが地方には珍らしい型の
ものが澤山ある。又その石佛の

られぬ優雅なものであり、その
花桶に至つては都の陶器の花桶
に相懸すべき、桧材で造つた木
の香高い逸品で、山里より折つ
くる百合や七草を生けたところ
はすばらしい風流味がある。
現在の桧枝岐の村人たちがど

はっきりしない

祖先

前に田島町で榊原重忠星大
吉氏に遇つたことを書いたが、あ
の際に次の話も氏より聞いたの
である。星大吉氏の生地は桧枝
岐でありその祖先はこの村の起
りから續いてゐる。

星家の家系によれば鎌川時代
の初めに秋田守の次男星四
郎左衛門吉國なる人が、星家に
入嫁した事がある。この吉國
の祖先は星家と同一である。
然し僅かな星氏の家系には
これ以前の記録がない、それで
は平家に關係するかどうかは分
らない、ところが星氏の本姓は
千鶴氏であるといふから僅に只
この一事を以て平家の一族であ
るといふ證據を知るのである。

桧枝岐村は星三郎氏方に家
肥といふ習慣があるといふが、
遂にこれに手を離れる機会が無
しに終つたが、これも又眞の祖
先や起因を知るには不十分であ
ると隨いてゐる。

此村には現在星、平野、
の三族が戸数九一八、人口六一
六人ばかりの大部分を占め（現
在の戸籍人は五七二、中女子は
二二二人多い）、最近越後方面よ
り二人ばかり新加入の姓名があ
る。結局この村の傳説である平
家の落村人は確定的なものでは
ないが、さうだと信じて大した
問題ではないのである。

8/18 記事

桧枝岐を語る【中】

働けどみち足りぬ生産物

カット

桧枝岐の農家

103歳の長寿者

画

石ころ畑



「石ころ畑付近」

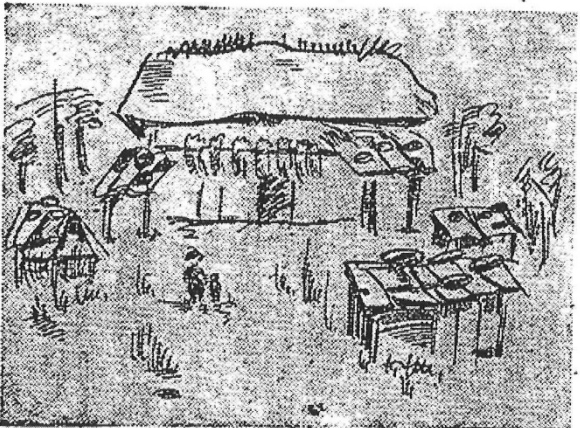
桧枝岐温泉観光協会提供

岩魚のくん製と山椒魚

南會の神秘境

る探を境

文 書 小 林 金 次 郎
大 田 熊 三



桧枝岐を語る【中】

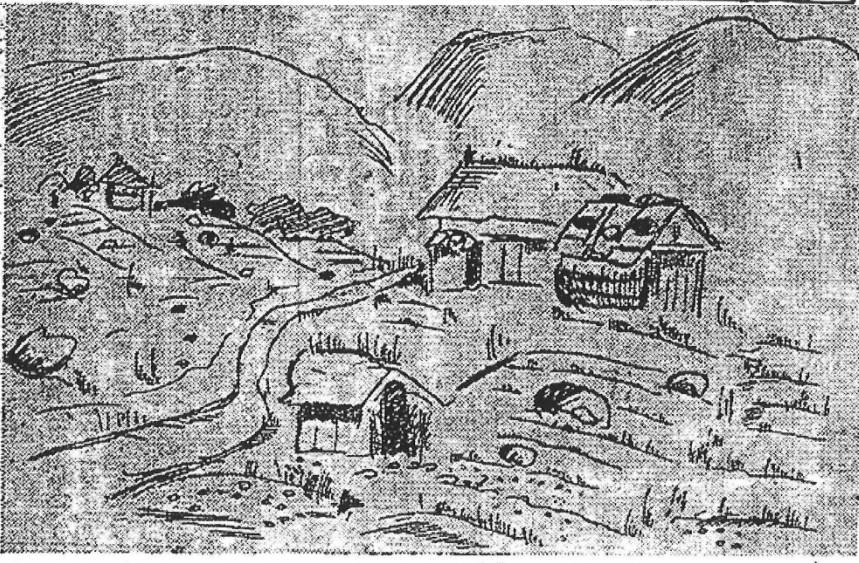
働けどみち足りぬ生産物
桧枝岐の人々は非常に勤勉で

ある。小さきも老ひたる者も汗みどろになつて働く。
働かなければ生活を破けてゆ

くことができ得ないのである。
稲田は無い、米は一粒もとれない、畑...それさへも石ころだらけの見るに忍びない。畑、獨れば獲る。獲るころは湧く。湧いてくるから結局はその上に種を播くより他は無い。牧場するものは粟と稗とそばと馬鈴薯、だがそれさへも多量には取れない。藪かにとれる馬鈴薯は、馬鈴薯大のものの上等のもので普通は小ぢやな、赤い色のもので、不運なことには野鼠と兎が山から澤山下りて来て、これを喰ひ散らす、それす不作のときは畑一枚の馬鈴薯の収穫は二升五合位だといふ、全く米期間には困つてゐる。

百三歳の長寿者

冬季は職として木材により、郷のへらと杵子、メツベ（解き箱）それに前出の花桶がある、桶は日光方面へどしどし運ばれてお土産品として郷に賣れる。一個三十五錢であるが、どうしても交通不便のために多くの運賃を要するから四方へは未だ



多く出されない。
これなどを鶴島ビルディングの店頭で置くものならば忽ち羽の生えたやうに賣れるだらうと思はれる。
村人はかうした彼等の所産を以て物々交換的に色々の生活資料を得るのである。
彼らは今尙生活に追はれて孜々と働きつゝけてゆかねばならない。僅か四五才の子供や、腰も曲るやうな白髪の老女までが朝から夕刻まで汗に塗れて血の出るやうに働く。それならばこれ程勞働に追はねばならぬ。彼等はそれのために健康を損ねて早死するかと思ひは事實は全くこれに反してゐる。この村の長老星直次翁は百〇三歳を以て大正十一年八月中旬に静かに往生された。又御大典記念の折には高齡を以て天孫を受けたものが十一人に及んだといふ郡内第一の高齡村である。

岩魚のくん製と山しよう魚

この村の名物として賣り出されるものに、この村を貫流する桧枝岐川から澤山にとれる岩魚のくん製がある、これは川からとれる岩魚を生木の燻で燻したもので味も軽く高尙で、東京方面へも出てゆく。年額約千圓に上ると言ふ。

この岩魚と共に最近賣出されるのは山椒魚である、長さ五六寸ばかりでこれを燻製にして賣出先は東京である、一匹七圓から一錢で雌雄組合せて賣る。面白いことに私はこの事など全く知らずして始めてこの村へ足を入れた七月二十七日夕刻村の入口で木ヲ製に燻で燻した小童の山椒魚の燻製を拾つた、後でこうしたことを聞き成程文化の劣等をさるものは子供である事を知つたのである。
(カットは桧枝岐の農家、本文挿入は石ころ畑)

カット

壁のない檜枝岐村の住家

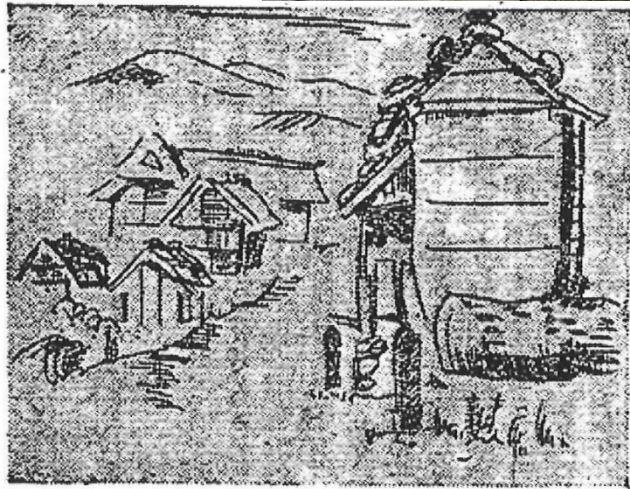
「檜枝岐の住宅」

檜枝岐溫泉觀光協會提供



質素な村の人々

南會の神秘境



る探を

小 林 金 次郎 文
熊 田 大 三 書

檜枝岐を語る【下】

質素な村の人々

やがてうらなひが来る、盆踊りも近づいてゐる。ところがこの中には盆踊りはない。そのかはりお祭りは盆の七月

十八日、子村、全郷の人々が郷守に集ふて遊ぶが、この時青年の郷士がある。

壁の無い村の話

ヨイト見なされ、櫓枝殿嬢は
モンハ妻で嫁にゆく
で婚禮などは全く質朴極まるも
のだ、儀式は勿論のこと一生一
代の晴の舞臺であるこの日花嫁
は青段布にモンハ妻といふ恰好
でゆく。

木綿づくめが普通で、絹物を着る人はほとんど高貴な人に限られてゐる。花紋は向ふの酒宴に行つても舞さんと並んでかしこまつてゐる分ではなくて、直ぐ自ら客の接待をすると言ふ態度である。

西條も好むつて質料で香料と
 して一戸三錠づゝ對戸が贈ると
 いふ事した。

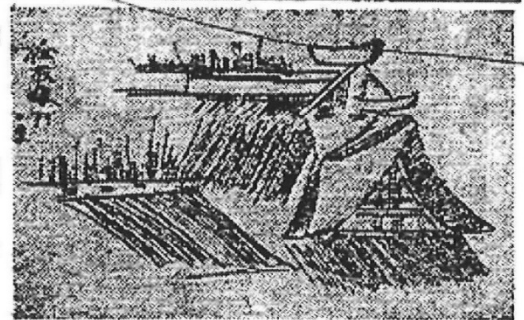
佛事は又神祕で森羅や饅頭などの器ものもなく、穴掘りに際しても酒は五合と決めてこれを全部で分けて飲む。足らざる物質を人情の美しさですべて解決してゐる。

壁の無い村の話

臨のない村は拾枝殿のみに限つたわけではなく雪の多い日本の諸國には深山見出す現象である、しかしながらこの地方が大

画

古風な屋根づくり

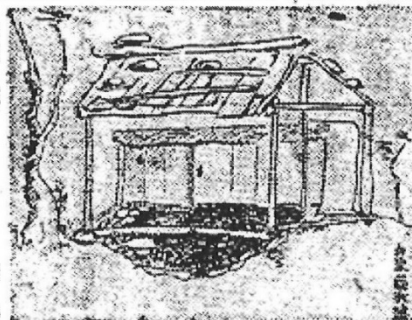


森林園である關係から思ひきつた材料を備氣なく使用してゐることが面白いのである。

皆入母極式の建築で、屋根は瓦葺でふいてある。そしてその流相の突端には名古屋の町を見るやうな飾りのある家も多い。

森に思ひきつた龍雲は村人の
囃である。町ならば早速士族と
いふところであるが何ぞ森林
王國の里故にすべては丈夫な材
木づくりである。この家根は五
寸からの厚い板でふき。この上
には大きい石が敷つも装つてゐ

蘭の自家乾燥場



る。壁は勿論厚い板で圍んであり、堅かな鎖がとりつけてある。この中には家畜一頭を入れてある。

土壁で面白いのは丸腰の自家
庭のことにであるが、私た
ちの目に驚れた土壁はこれが一
つであつた、粗末な小屋の中に

土間の壁があつて、この上の厚い檜板の上部の室には幾つも棚があつてこれに生薬を入れて焚火で乾燥をする。完全とは言はれぬがかなりよい成績を上げてゐる。

日カツトは 壁のない檜枝
鼓刺の住家と挿入スクワチは古
風な屋敷づくり、及び庭の自家
乾燥